佐岡小・繁藤小中
休校検討経過

今月号で特集した３校の休校に至った経過について、お知らせします。

高知県の示す適正規模

近年の少子化に伴って、児童生徒数が激減し、複式学級を有する小学校数は117校、約44％を占める状況（平成16年5月1日現在）となっており、高知県教育委員会では、学級を組織する集団として望ましい最小限の人数について、教育効果の側面から検討しました。平成17年3月に高知県小中学校適正規模検討委員会から今後の小中学校のあり方を望む検討結果が次のようにとりまとめられました。

（1）子どもたちの教育効果の観点から、学級規模は20人程度か、それ以上が望ましい。

（2）学習・教育条件の観点から、学級規模は25人程度か、それ以上が望ましい。

（3）学校経営上の観点から、学校規模は最低小学校12学級程度、中学校6学級程度が必要である。

（4）通学区域への配慮や、保護者や地域の方々とのコンセンサスの確保が必要である。

◇　◇　◇

教育を考える会発足

これを受け、平成19年11月に発足した**香美市の教育を考える会**は6回の会議を開催し、検討した結果、県の示す適正規模の基準を満たしていない学校のうち、佐岡小・繁藤小・繁藤中は複式学級であり、今後も児童生徒数が増加傾向にならない状況であり、市として適正規模検討委員会を設置し、小中学校適正配置計画を検討すべきであるとの提言書が平成21年3月に市教育委員会に提出されました。

◇　◇　◇

香美市小中学校適正規模検討委員会発足

香美市の教育を考える会の提言書を受け、平成21年11月、**香美市小中学校適正規模検討委員会**を発足し、6回の審議を重ね、市教育委員会に対し、平成22年11月に香美市小中学校適正規模検討委員会提言書が提出されました。

提言書では、県が示した基準を適用せずに独自に次のとおり学校適正規模における最低基準が示されました。

①望ましい学校規模で多様な教育活動が継続的に可能となる目安（将来的な再編目標）は、小学校では、学年規模が30人以上40人、学級数は6学級以上、全校児童数180人以上。中学校では、学年規模が30人以上40人、学級数は3学級以上、全校生徒数90人以上。

②過小規模の回避に向けての目安（早期の再編目標）小学校では、学年規模が9人以上、学級数は6学級以上、全校児童数54人以上。中学校では、学年規模が7人以上、学級数は3学級以上、全校生徒数21人以上。

③香北地区・物部地区については、過小規模の適用はせず、但し書きとしての目安を設定する（特例措置）。小学校では、学年規模が0人以上10人、学級数は3学級以上、全校児童数10人以上。中学校では、学年規模が0人以上10人、学級数は2学級以上、全校生徒数10人以上。

◇　◇　◇

休校の決定

この提言を受け、市・教育委員会で検討した素案（佐岡小・繁藤小・繁藤中の休校）を**香美市学校適正配置等審議会**に諮問し、地元の合意を得て、3校の休校を決定しました。

市長
門脇 槇夫

小規模校では、児童生徒一人ひとりの個性を育むことに有利である面もありますが、一方では、望ましい教育効果が十分に得られない場合や、団体行動による一般的な学校行事を行うことが困難となる面もあります。

本来、学校教育は、集団で行うことを基本としており、子どもたちが集団で切磋琢磨し、学び合う場として、一定の学校規模の確保が重要です。

今後は政策的な人口増加策を実施していくとともに、子育てしやすい環境を整え、充実した学校教育が行えるまちづくりの実現に取り組んでまいりますので、より一層のご理解ご協力をお願いします。

教育長
時久 恵子

今回の休校にあたっては、保護者や地域の皆さまには、忍びない思いを抱きながらも、近年の情勢も踏まえて、検討を重ねていただき、心よりお礼申し上げます。

私は、小規模校に長く勤務した経験があり、小規模校ならではの地域と一体となった教育、異年齢の構成を活かした複式授業を通して育った子どもたちの姿を実感しています。

しかしながら、児童数が激減してしまった今、幅広い社会性を培うことができる教育環境の中での新たな歩みが必要だと考えます。

歴代PTAをはじめ関係者の皆さまに厚く感謝申し上げます。

広報 香美 No.85
ホームページアドレス
http://www.city.kami.kochi.jp/
編集と発行 香美市広報委員会
☎ 0887-53-3111 FAX 0887-53-5958
メールはホームページからお願いします。
事務局・香美市役所総務課 秘書・広報広聴班
〒782-8501 高知県香美市土佐山田町宝町1-2-1